

ICTを活用した保護者支援の在り方について

—新型コロナウイルス感染症による登園自粛期間における取り組みから—

廣 瀬 三枝子・平 尾 美 香・林 美 代

1. 問題の所在と目的

本年度は、新型コロナウイルス感染症 (covid-19) の集団感染防止のため、教育・保育機関の登園自粛および臨時休園が、政府要請の形で行われた。そのため新年度をコロナ禍で迎えることとなり、本園では4月7日に始業式、10日に3密を避けての入園式を終え、2日間の保育後すぐに保護者へ「新型コロナウイルス感染拡大防止に向けた幼稚園登園自粛について」のお知らせを配信することとなった。準備や周知もままならぬ状況下で15日から始まった登園自粛は、子どもたちにも戸惑いを与えることとなったが、それ以上に保護者にも大きな不安と負担を与えることとなった。登園自粛期間中も預かり保育は実施していたため、最低限の保護者支援はできていたかもしれないが、今まで顔を見て話すことが日常的に当たり前だった生活が奪われてしまった喪失感大きく、職員間でも会えない子どもたちや保護者とのようにすれば繋がることのできるのかを考えるようになった。職員間では、「新入園児にとっては担任の先生の顔もまだはっきりと分からないのではないか」という不安の声や、「戸外遊びの大好きな元気な子どもたちが家の中でずっといなければならないのはストレスだろう」、「保護者の方もストレスを抱えていないか心配だ」といった声が日増しに増えていった。

このような今までに経験したことも無い生活を余

儀なくされた子どもたちと保護者に対して、応援のメッセージを届け続けることが園にできる新たな保育の形ではないかと考え、活用していたメール配信システムを利用して繋がることにした。その目的は、「自粛期間中も親子共に笑顔で元気に過ごせること」、「園をいつも身近に感じられること（新入園児の子どもたちには、園のことを知ってほしいという願いもある）」、「園はいつもみなさんの応援団でいること（いつでも目を向けてくれる安心感）」である。そして、自粛が明けた時に登園した子どもたちが、抵抗を感じることなく園での遊びに自然と向き合えることを願った。4月当初は写真の配信のみであったが、4月末頃にはそのシステムに動画配信も追加できるようになり、5月からは本格的に動画配信も開始した。

現在、幼稚園の機能として子育て支援が求められている。幼稚園での子育て支援としては、「保護者や地域の人々に機能や施設を開放して、園内体制の整備や関係機関との連携及び協力で配慮しつつ、幼児期の教育に関する相談に応じたり、情報を提供したり、幼児と保護者との登園を受け入れたり、保護者同士の交流の機会を提供したりするなど、幼稚園と家庭が一体となって幼児と関わる取組を進め、地域における幼児期の教育のセンターとしての役割を果たすよう努めるものとする」¹⁾とあるように、主に教育のセンターとしての役割が言われている。しかしこれからの子育て支援では、「園と園児の保護者との関係については、助言や相談にとどまらず、保護者の自己決定を尊重したり、喜びを共に感じたりし、パートナーとして子どもの育ちを見守っていく関係を築いていくこと」²⁾が求められている。そのため登園自粛期間中の配信については、幼稚園に

令和2年11月30日受理
連絡先 〒769-0201 香川県綾歌郡宇多津町浜一番丁10番地
香川短期大学 子ども学科
TEL 0877(49)5500 FAX 0877(49)5252
Email fuzoku05@mail4.kbn.ne.jp

おける子育て支援の意味を考える契機となったのではないかと思われた。

そこで本研究では、登園自粛期間中に家庭で保育を行っている保護者を中心に行った園と繋がるICT（Information and Communication Technology）活用についての実践を報告するとともに、登園自粛明けの6月に実施した保護者アンケートとそこに記載されていたエピソード記録をもとにテキストマイニングを行い、内容を分析することによって効果と課題を明らかにすることとした。

2. メール配信システムを活用した配信

（1）幼稚園からの配信

登園自粛期間中の配信は、メールでの写真入りの配信（図1、図2、図3、図4）が38通と、絵本や紙芝居の読み聞かせ（限定公開として配信）など各学年団の保育者からの動画配信（図5）が12通であった。写真入りの配信は、主に園でいつも子ども

たちが身近に親しんでいた生き物の様子、園庭の草木や野菜の様子、知っている遊具や先生を題材にしたものである。子どもたちが保護者と楽しめるようにクイズ形式で伝え、その答えの配信はできるだけ親子で調べたり話し合ったりする時間を設けることができるように翌日とした。

初めの動画では、急遽登園自粛となりストレスが溜まっているであろう親子が「笑顔になれる動画」を目指し、出演する教職員全員で登園自粛期間中の

かがわたんきだいがくふぞくようちえんの みなさん。おまたせしました。クイズのこたえです(^^)

キャベツがだいすきな アオムシは『モンシロチョウ』に へんしんします。みんな、わかったかな。かんたんだったかな？つぎはなんのクイズに しようかな。おたのしみに(^^)

図3：クイズの答えの配信



図4：クイズの答えにつけた写真

かがわたんきだいがく ふぞくようちえんの みなさん！こんにちは！おげんきですか？ようちえんが おやすみになって みなさんにあえないので せんせいたちは さみしいです。そこで きょうからまいにち ようちえんのニュースを メールで おくります。おうちのひとと いっしょに メールをよんだり しやしんをみたりして たのしんでください。きょうは ようちえんのウサギさんのしやしんをおくりますね。さて クイズです。みなさんは ようちえんにウサギが なんびきいるか 知っていますか？しやしんに うつつていないウサギさんもいるよ！こたえは またあしたね。おたのしみに！

図1：初めてのメール配信



図2：初めてのメールにつけた写真

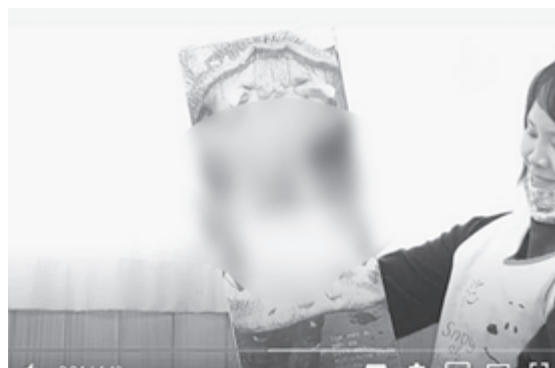


図5：読み聞かせの配信（限定公開）

過ごし方を笑いも交えながら伝えた。その後は、学年に合わせた絵本や紙芝居の読み聞かせを学年団の保育者が行う動画を配信した。夜中に地震が発生した日には、地震の紙芝居を配信して親子で防災について話し合う機会が持てるように配慮した。さらに保護者コーラスサークルの協力による誕生祝いの歌の配信(図6)も毎月実施し、保護者も動画の配信に積極的にかかわる機会の提供も行った。

(2) 幼稚園からの配信を受けた保護者からの返信

幼稚園からの配信後に、保護者からの返信メールを受け取ることがあった。多くは、「配信を楽しみに待っている」という内容であった。例えば、「幼稚園からのメールをいつも楽しみにしています^^特にウサギとカメキチの写真がお気に入りのようです。」(原文ママ、以下同じ)とその時の我が子の様子を知らせる文である。「幼稚園への気持ちも高まります。ありがとうございます!」といった、幼稚園に登園再開時のモチベーションに繋がることに期待した文や、「家族全員元気です。幼稚園の先生方も身体に気をつけて頑張ってください。ふぞくニュース、兄姉共に楽しんでいます。ありがとうございます。」「先生方、子供たちのためにとっても楽しい動画をありがとうございました。『せんせいがおくってくれてうれしかった! せんせいたちかっこよかった! せんせいたちみんなにあいたい』と何度も何度も観ていました。ふぞくこニュースも毎日楽しみに待っています♪ みんなで登園できる日を楽しみにしています。ありがとうございます。」と教職員への励ましの内容が書かれているものも見受けられた。さらに、子どもの言葉で「うさぎのすきなものをしらべたよ。たんぼば りんご

しろつめぐさ さに一れたす」と書き込まれているものもあり、子どもたちも配信を楽しんでいることが伺えた。コロナ禍で不安の中、保育者としては家庭での様子が心配していたが、このような取り組みに前向きな言葉や励ましのメールを受けて、教職員も逆に元気をいただく結果となった。

また、保護者が頑張っている様子や不安な心境が理解できる内容のものもあった。「子供たち毎日楽しみにしており、家族みんなでみるのが日課になっています。えんだよりに記して下さったように、家庭でもこの状況を前向きにとらえて工夫して大切に過ごせたらと思います。」「先生方ともお会い出来る毎日があたり前だったのに、涙がでてきてしまいました。1日も早く、また、安心して幼稚園に通うことができる日がくることを願い、今はステイホームしようと思います。」「お兄ちゃん達と一緒に動画拝見しました!! 見慣れた懐かしい(先生の)顔ぶれにこちら心も和みました!!」「慣らし保育の途中で自粛になってしまい、幼稚園のこと忘れてないかなと心配にもなりますが、時々自分から幼稚園での事を話してくれるので少し安心してます。」「YouTubeで久しぶりに先生達の姿を見れて、みんなで園長先生が現れた時にわーっと声を出して喜んでいました。W先生やA先生、H先生はどこ〜?と、押し合いながら観させてもらいました。Rは画面上でW先生に会えて嬉しかったと言っています。何回もみんなで観て楽しませてもらいます! 子供に怒りそうになったら、動画をみて、みんなで落着くようにしてみます。」等である。これらのメールからは、幼稚園からのメール配信が家族の笑顔になるきっかけづくりになっていたのではなかと考えられた。

他には、「先生ありがとうございます。(子どもからのありがとうメッセージ動画)」と子どもからの動画が届き、教職員が大喜びでその動画を見た。子どもたちの元気な姿が見られたので、保育者として嬉しい結果であった。このように動画を双方向で活用して励まし合えたのは初めてのことであり、思いもよらぬ効果を得ることができた。絵本の読み聞かせについての返信では、「絵本の動画配信とても良かったです。寝る前に4つの絵本を見て寝ました。子どもたち本当に嬉しそうでした。色々考えてくれ



図6：保護者コーラスサークルの配信

て有難うございます。」と、配信内容を前向きに上手く活用する保護者の姿も見えた。

このような登園自粛期間中の返信メールを受けて、各家庭の様子が伺え、その様子を知り頑張っている姿を想像することで、教職員の仕事の励みになり、継続して様々な配信を考える意欲に繋がっていた。双方向で繋がりが配信し合って、今を頑張っている力になっていたと考えられる。

3. 保護者アンケートの調査結果

(1) アンケートの実施時期と回答数

登園自粛期間中にICTを活用して幼稚園から様々な形の配信を行ったが、その取り組みについて本園の全保護者を対象にアンケートを6月中旬に実施した。その結果、123件の回答を得た。回答率は86.6%であった。

(2) 選択肢付きの回答結果

登園自粛期間中に幼稚園から配信されたメールを受けて、「園との繋がりをどれくらい感じるか」と、「今後もICT活用が必要だと思うか」については五件法による選択式で調査を行った。

「園との繋がりをどれくらい感じるか」の質問については、「大変感じる」と「どちらかと言えば感じる」を合わせると全体の約97%であった（図7）。回答した殆どの家庭は幼稚園との繋がりを感じており、園として掲げた保護者と繋がるという目的を達

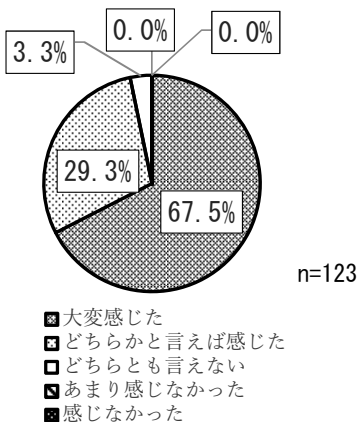


図7：園との繋がりをどれくらい感じたか

成することができたと言えよう。

「今回の様な活用の仕方は、今後も必要だと思うか」の質問についても、「大変思う」と「どちらかと言えば思う」を合わせると全体の約94%であった（図8）。どのような内容の配信が好まれ、子どもたちとの会話が弾んだのかは家庭によって異なっているであろうが、それでも家庭での過ごし方の中でICT活用が認識され、その活用効果が得られていることが推測された。今後もICTを活用することが求められるだろう。

「ICT活用教育やメディア教育の研修会があれば参加したいか」の質問については、「大変思う」と「どちらかと言えば思う」を合わせると全体の約51%であった（図9）。半数を超える保護者が研修を望んでいるという結果から、ICTを活用した取り

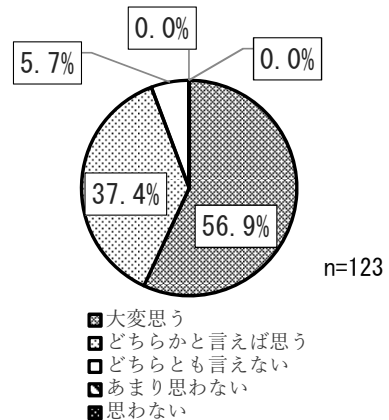


図8：今回の様な活用の仕方は今後も必要だと思うか

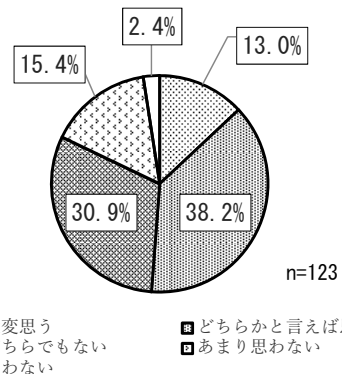


図9：ICT活用の研修があれば参加したいか

組みに関する関心の高さが伺えた。

(3) 自由記述

今回の幼稚園からのメールを受けて思ったことや考えたことについての自由記述では、77名が回答をした。その回答内容をサブグラフ共起ネットワーク (Modularity) (図10) で表し、KWICコンコーダンスで確認した後、内容に基づきラベリングを行った。記述は大まかに「自粛中の親子の楽しみ」「園と繋がる喜び」「先生と繋がる喜び」「幼児期ならではのICT活用」の4つに分類された。

「自粛中の親子の楽しみ」に関する記述としては、「親子での楽しむ」機会になっていたことや「子ども自身が楽しむ」機会となっていたことを記載する保護者が多く、登園自粛期間中の楽しみを提供することができたと考えられる。「園と繋がる喜び」に

関する記述としては、「園の様子が分かる」ことや「園を身近に感じた」ことが記載されており、「園との繋がり」をしっかりと感じていたと思われる。さらにその繋がることができた思いを「園への感謝」という形で述べている保護者もあり、「園と繋がる喜び」を家庭生活の中で感じていたことが分かる。「保育者と繋がる喜び」に関する記述では、園との繋がりの中でも担任の保育者と繋がれたという特別な喜びを感じ、保育者の顔を見ることができて喜ぶ子どもたちの姿や、いつも絵本を読んでくれる保育者が読む読み聞かせ動画を子どもたちは何度も何度も見ていたという子どもたちの姿を報告する保護者が多かった。このように大好きな保育者の動画は、心地よい安心できるひと時となっていたことが分かる。実際の自由記述には、「今回自粛期間中、自宅での代わり映えのない時間の中に、先生方の動

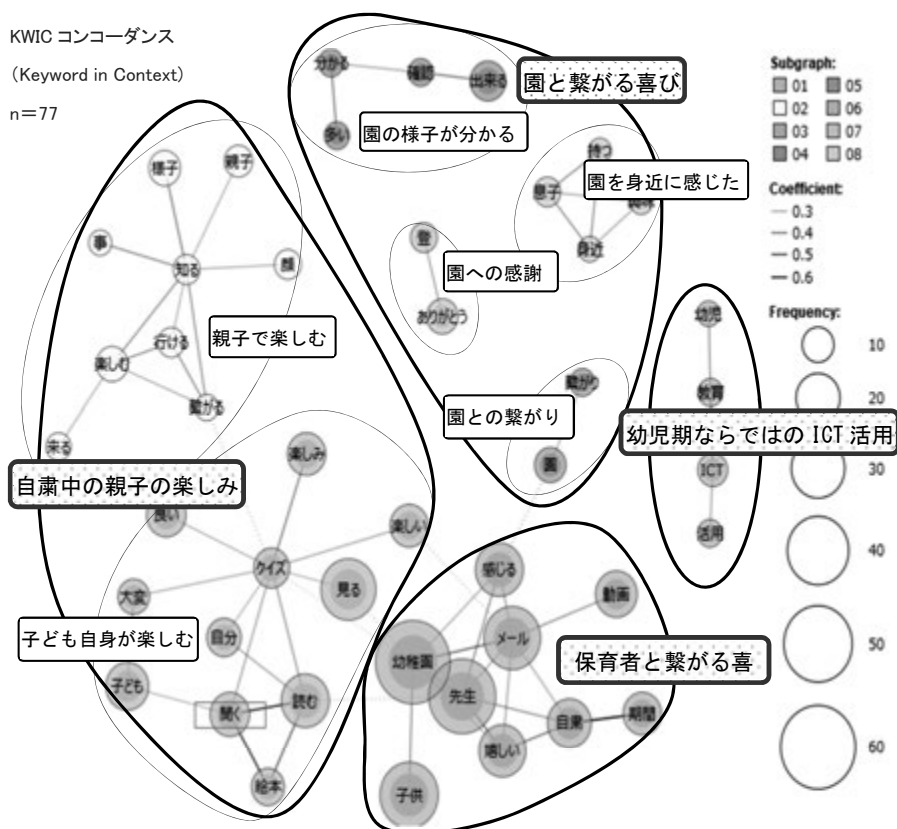


図10: 「自粛期間中に園からメールを受けて思ったことや考えたこと」のサブグラフ共起ネットワーク (Modularity)

画やメッセージを見る時間が加わることで、メリハリを持たせることができたし、園や先生との繋がりを感じられてすごくよかったです。」という回答のように複数の項目が示されており、ICTで園や保育者と繋がれたことで、親子が笑顔で向き合いコミュニケーションをとる時間を提供できたと言えるのではないか。

そして「幼児期ならではのICT活用」に関する記述である。この登園自粛期間に初めて親子でスマホやタブレットを使った家庭も多かったようであるが、幼稚園からの配信が親子でICTに向き合うきっかけになり、家庭でのルールといったICTの使い方などを親子で話し合う契機とした家庭も見られた。いきなり始まった登園自粛期間であったため、家庭での時間をどのように過ごすか考えた時に、ICTと向き合うしかなかったのかもしれないが、ICTの使い方を親子で考えるよい機会になったと言えよう。登園自粛期間中、家庭と繋がりが続けたことが、園や保育者との関係をより深め、ICTという新たな活用への発見をもたらしたと言えるだろう。

家庭と繋がりが続けた効果とも言えるような「家族で幼稚園の情報を共有できるので、会話の種になりました、“いよいよ幼稚園に通常通り通う時がきたぞ”という時も、毎日情報を送って下さっていたので、殆ど緊張することもしなかったので良かったです。」との回答もあった。入園式後数日で登園自粛となり、新入園児にとっては担任の顔も、園内のことも何もまだはつきり分からない状態であったため、親子共々これから始まる園生活への不安をもって入るのではないかと考えていた。これは子どもたちや保護者に限ったことではなく、園としても自粛明けの登園には不安を感じていた。その不安を少しでも解消できるようにと保育者の顔が分かる動画も配信したのであるが、この効果は大きく園が予想していたような新入園児が集団生活を不安に感じて泣き出すことも少なく、すぐに園生活に適應することができた。保護者にとっても、子どもたちが泣かずに楽しく園生活を迎えることができたという現実には、大きな安心感に繋がったことであろう。これは、登園自粛期間中にICTを活用して園と繋がりを持てたことの賜物であろう。

さらに保育時間中には、「ふぞくっこクイズ」に

出ている答えを探しに保育者や友達と園庭の動植物を見に行く姿もたくさん見られた。身近なことをクイズにしたことで、幼稚園が画面を通してではあるが身近なものとして認識されていた証拠であったと言えるのではないか。また、「怒られて沈んだ気分のおきもコドモンを見せると幼稚園をおもい出して楽しくなるようで、気持ちの切り替えができたので、助かりました。」「うちは母親が子どもを見て、父親は出勤が必要な仕事であった為、孤独感や閉塞感で息が詰まりそうだった、自分しか子どもを見る人がいないように感じていたので、先生方が子どもに眼を向けてくださる様子を感じ、心強かった」などの登園自粛期間中の保護者の心境について語られた回答からも分かるように、幼稚園からの配信は登園自粛期間中の保護者の不安や困難感を緩和できる機会ともなっていたようだ。保護者も様々な不安を抱えていたと思うが、この配信は子どもと笑顔で向き合うための機会として有効だったと言えるだろう。

（４）活用において疑問を持った保護者の回答

本園の取り組みについておおむね肯定的な意見が多かったが、全ての保護者が肯定的であったわけではない。一定の評価はしていても、ある一部分に不安や疑問を抱く保護者もあり、（２）の選択肢付きの回答において、「どちらとも言えない」と回答した保護者が「今回の幼稚園からのメールを受けて思ったことや考えたこと」の欄に記載した自由記述についても検討する必要がある。

「子供がメールを見ることで、幼稚園のことをおもい出し、嬉しそうだった、ただ動画とか長くなると子供は飽きている。」という記述からは、動画等の画面越しのコミュニケーションには限界があると感じており、幼児期にICTを活用する際には時間的な検証が必要ではないかと感じていることが伺える。確かに、顔を合わせて向き合い話し合う時は自然と会話が生まれお互いのやり取りが可能になるが、画面越しでの絵本の読み聞かせを行った場合、保育者の表情がよく見えない時などただ画面の映像を見ていることになるし、子どもが何かつぶやいたとしても画面越しの保育者が反応してくれるわけではない。そのような状況下では、子どもたち、まし

て低年齢児であればなおさら集中できる時間は短くなることが考えられる。動画を配信するにあたっては、配信時間の長さや保育者の表情が見えるような撮影の仕方等に配慮が必要だと言えよう。

仕事をしている保護者の回答の中には、「初めの頃のように1日1通程度なら楽しく見れますが、何通にもなると仕事で確認出来なかった場合どんどん見ないまま溜まってしまいます、確認作業が業務のようになり苦痛です…」というものがあつた。保育者としては不安を少しでも解消できるようにとの願いを込めて配信していたのだが、就労している保護者にとっては、複数の配信は別の不安を感じるものとなっていたようだ。園からは動画の配信とともに必要な周知事項の配信も行っていたため、重要な配信を見逃さないようにとストレスを持たせてしまったのではないかと考えられる。保護者側の事情なども考慮し、配信回数や周知の仕方にも配慮が必要になってくることが伺えた。就労している保護者と家庭保育をしている保護者の双方にストレスのない方法で配信することも今後は考慮すべき事項と考えられる。

「基本的に幼児期は、ICT教育はそれ程、必要ではないとおもう、人間関係の土台作りにもなる幼児期には、しっかりと触れ合って、感じあって、いろんな気持ちを体験して欲しい、今回の様な長い期間、登園できない時の手段としての活用はいいとおもう、ただ、ICT教育が、幼児期の成長によいとおもえない。」と、幼児期は人間関係づくりに力を入れてほしいという意見や、「スマホで幼稚園の情報を子供に見せたときに、子供はスマホを渡してくれたとおもい自分で操作してYouTubeを見てしまうので、なかなかスマホを見せることを躊躇してしまいました。」と、子どもの様子からICT活用には戸惑いを感じたという意見も見られた。幼児期におけるICT活用については、保護者はもとより幼稚園としても本格的に活用するのは初めてのことであり、そこでの戸惑いはあつたと思う。ICTを活用するからと言って子どもたちの本物の体験を軽視するわけではなく、これまで同様人格形成の基礎を培う重要な時期である幼児期に、本物の体験を重視するということは、これからも変わることは無い。しかしその中でICTがどのように生かされるべきか、そ

の活用効果ははっきりと見えていない現在においては、必要な環境と捉えることは難しいのではないだろうか。そのため、家庭でどのようにICTに向き合わせるべきか分からず、活用に躊躇していると考えられる。

ベネッセ総合研究所が2013年と2017年に実施した乳幼児の親子のメディア活用調査³⁾においては、母親のスマホ所有率が2017年には92.4%と2013年と比べて31.9ポイント上昇、乳幼児がスマホに「ほとんど毎日」接している家庭は2017年には21.2%と2013年と比べて9.6ポイント上昇しており、家庭生活においてもICTを活用する機会が急速に進んできていると指摘されている。そのため、幼児期の教育のセンターとしての機能を持つ幼稚園等の教育・保育機関が、家庭におけるICTとの向き合い方についてもモデルを示したり、情報を提供したり、アドバイスをを行ったりできるようになることが、喫緊の課題として挙げられるのではないだろうか。ICT活用に戸惑いを隠せない保護者の意見の中にも、「親としては見せない与えない方が楽かもしれませんが、良い悪いを自分で判断して、必要な情報を抽出する能力は幼児期から訓練しないとイケないのかもしれないと感じております。」と向き合い方をこれから考えていこうとしている前向きな意見も多くあつた。ICT活用に対して、時代の流れの中で前向きに捉えようとしているが、はっきりとどのように活用すればよいかが見えていない様子が伺えるため、保護者の研修の場を提供するという必要もあるのかもしれない。

現在、いつまで続くか分からないコロナ禍にあり、いつまた登園自粛が始まるか分からない不安を抱えながらの生活をしている中、家庭におけるICT活用については、日々考えなければならない必要性が高まってきている。そのため、幼児期におけるICT活用に関する取り組みを見直し保育者側の研修を重ねるとともに、保護者の研修の場を提供することも、教育機関である幼稚園として必要であると言えるのではないだろうか。

4. まとめ

以上のように保護者の方のアンケートから、登園

自粛期間中に園と家庭を繋げ続ようとしたICT活用の効果は高かったと考えられる。ICTを活用することは、登園自粛期間中の子どもたちや保護者の不安やストレスを笑顔に変える効果を生んでいた。それは、そこに登場するのが日頃から親しんでいる園の動植物や保育者など身近な人や物であったことで、子どもたちの興味や関心を引き出して、親子の楽しいコミュニケーションやそこで得たものを子どもなりに行動に繋げていったと言えよう。例えば、動植物のクイズの答えを探そうと公園に出かけて同じものを探したり、クイズの答えを調べるために図鑑を広げたり、楽しいメールを自分で読むためにひらがなに挑戦したりと、家庭にいながらも園で過ごしていた時のような活動を展開しようとしていたようだ。その様子を見て保護者も楽しい気持ちになり、子育てで支援としての効果を得たと考えられる。

しかしながら、仕事をしている保護者の負担への想像に欠けていたこと、見ている幼児の発達に合わせた動画のとり方等を考えることが不十分であったことなど、配慮の必要性も課題として出てきた。また保育者、保護者ともにICT活用の研修を受ける機会の必要性も感じられた。

これからの時代、ICT活用は様々な所で必要とされるであろう。そのため、ICT活用に関心をもたないという選択よりも、関心を持ち続けて幼児期における効果的活用について考えを深めていくべきであると考え。家庭との連携においては、「子どもを真ん中にして保護者との心のつながりをつくることから、保護者自身が安心して子育てをする環境をつくりだしていくこと」⁴⁾が、保育者にとっては重要な使命と言われている。このような時代の流れの中で、保護者が不安なく子育てに笑顔で向き合えるように、様々な対応を考えていくことが幼稚園として求められてきているのではないだろうか。

ICT活用の在り方については、2012年に生きる力に繋がる「21世紀型能力の基礎力」⁵⁾に、情報スキルが加わったことから、読み書き算盤と情報活用能力が必須となってきている。学校教育の始まりとして位置づけられた幼児教育においても、Well-Beingを目指した人間教育としての情報教育の在り方として説かれた情報特性、人間特性、メディア特性を認識することは、人格形成の基礎を培う重要な幼児期

から必要な学びとなってくる⁶⁾と言われており、発達特性を踏まえたICT活用を検討する必要がある。

今回の保護者アンケートの結果を踏まえて、本園におけるICT活用の在り方について保育者間で話し合い、体験を補完する効果的なICT活用を考えながら、保護者とのより良い連携の実現に努めたい。

註

- 1) 文部科学省 (2017)『幼稚園教育要領』p.22
- 2) 保育総合研究会 (2018)『平成30年度施行 新要領・指針 サポートブック』世界文化社, p.31
- 3) ベネッセ教育総合研究所 (2017)「第2回乳幼児の親子のメディア活用調査」
https://berd.benesse.jp/up_images/research/sokuhou_2nyuyoji_media_all.pdf (参照日 2020.11.30)
- 4) 神長美津子 (2003)『保育のレベルアップ講座』ひかりのくに, p.90
- 5) 国立教育政策研究所 (2013)「社会の変化に対する資質や能力を育成する教育課程編成の基本原則」『教育課程の編成に関する基礎的研究報告書』5
<https://www.nier.go.jp/kaihatsu/pdf/Houkokusho-5.pdf> (参照日 2020.11.30)
- 6) 藤村裕一 (2003)「人間教育としての情報教育のデザイン」『日本教育工学会第19回全国大会誌』pp.313-314